

【史跡ガイドブック】

きもべつの歴史を歩く



平成 31 年 3 月
喜茂別町教育委員会

【史跡ガイドブック】

『きもべつの歴史を歩く』 発刊に寄せて

この度、喜茂別町教育委員会ときもべつ歴史プロジェクトの会が協働で、史跡ガイドブック『きもべつの歴史を歩く』を発刊することとなりました。

「きもべつ歴史プロジェクトの会」は町内外の有志により平成 21 年に発足した郷土史研究を趣旨としたグループであり、例会を重ねながら、会報『ヌブリ』の発刊、喜茂別最初の入植者である阿部嘉左衛門没後百年を記念した墓石の修復、各種講演会や文化祭への歴史資料展示など積極的に活動されており、平成 28 年度には後志管内教育実践表彰を受けました。

『きもべつの歴史を歩く』の編纂にあたっては、喜茂別町史の編纂に尽力された故前田克己氏寄贈の資料に加え、きもべつ歴史プロジェクトの会会員並びに有識者の方々の調査研究の成果が記載されており、町内にある史跡や開拓期以降の人々のくらしの跡、各種産業の遺構など多岐にわたって新たに発見された史実なども記載されています。

喜茂別町は、平成 28 年に開町 100 周年を迎えました。これまでの歴史を振り返るとともに、これからの 100 年を創り上げていく歴史のガイドブックとしてお読みいただければ幸いです。

最後に、本誌作成にあたり多大なるご協力をいただいた「きもべつ歴史プロジェクトの会」の皆様にご感謝申し上げ、発刊にあたってのご挨拶といたします。

喜茂別町教育委員会

教育長 細 田 典 男

目次：歴史散策の目的地を選ぶ

物語・・・・・・・・・・・・・2

※表紙のイメージ写真：ソーケシュオマベツ

地図・・・・・・・・・・・・・4

駅通所の内部から(北海道開拓の村)

1. アイヌのサケの漁場・・・・・・・・6

14. 山梨団体入植地跡・・・・・・・・20

2. 武四郎とヘタヌ・・・・・・・・7

15. 福島団体入植地跡・・・・・・・・21

3. 後方羊蹄(しりべし)社趾・・8

16. 阿部嘉左衛門の墓・・・・・・・・22

4. 本願寺道路開削と中山峠・・9

17. 比羅夫神社・・・・・・・・・・23

5. シンノシケコタン・・・・・・・・10

18. 留産地区地神の碑・・・・・・・・24

6. バッタ塚・・・・・・・・・・・・・12

19. 開村記念碑・・・・・・・・・・25

7. 喜茂別駅通所跡・・・・・・・・13

20. 黒沼と龍神沼・・・・・・・・・・26

8. 伏見稲荷神社・・・・・・・・・・14

21. 庚申堂・・・・・・・・・・・・・27

9. 南部団体開拓の碑・・・・・・・・15

22. 胆振鉄道喜茂別駅跡・・・・28

10. 先住民アイヌへの土地付与・16

23. お大師山・・・・・・・・・・・・・29

11. 三宅伊勢松頌徳碑・・・・・・・・17

24. 日鉄鉦山跡・・・・・・・・・・・・・30

12. ソーケシュオマベツ駅通所跡18

25. クレードル興農事務所・・・・31

13. 喜茂別馬頭観音碑・・・・・・・・19

26. 傾斜地試験場跡・・・・・・・・32



※上の写真：喜茂別墓地(緑町)の六地藏

資料・・・・・・・・・・・・・33

年表・・・・・・・・・・・・・54

あとがき・・・・・・・・・・・・・56

物語：紹介史跡の歴史を歩く



明治維新のはるか以前から、噴火湾のアブタやウスから尻別川の留産まで続く1本の道がありました。アブタやウスのアイヌたちは、季節になるとその道を辿ってサケ漁のために尻別川に來たのでした¹（各項目番号、以下同じ）。松浦武四郎も1857（安政4）年に、このアイヌのサケの道を辿って留産、相川あたりで尻別川に入り、最上流はヘタヌ²から河口のイソヤまで流域の探査に成功しています。武四郎にとってこの地は、阿倍比羅夫が侵攻の政所を構えた伝説の地「後方羊蹄（しりべし）」³でもありました。

1870（明治3）年から東本願寺が函館と札幌を結んで開削した本願寺道路⁴が尻別川を横切った場所は、相川のあたりです。その地に、内陸の開発に向けた実験地として旧亙理藩士阿部嘉左衛門、牛坂喜四郎、志賀条之進の三戸が派遣され、定住しました。その地が今の相川に当たるシンノシケコタン⁵です。この入植は3年後の1873（明治6）年で一旦終わり、本格的な開拓の進展に伴って「駅通所」の設置運営を担うために再び阿部嘉左衛門が尻別地区に入る⁷のは、1891（明治24）年になってからのことでした。この前後から、災害を克服しながら⁶入植開拓が飛躍的に進み、先駆的な開拓者が次々と鍬を下ろしていきます。^{9,11} 伏見神社⁸など開墾生活を支える様々な施設もでき、ソーケシュオマベツ駅通所¹²など交通の拠点も増えるなど、次第に羊蹄山麓開拓の拠点の一つとして市街地が形成されました。

開墾がほぼ行き渡った明治40年代半ばになって、本州での大水害を罹災した山梨や福島などの移住民が大人数の団体で

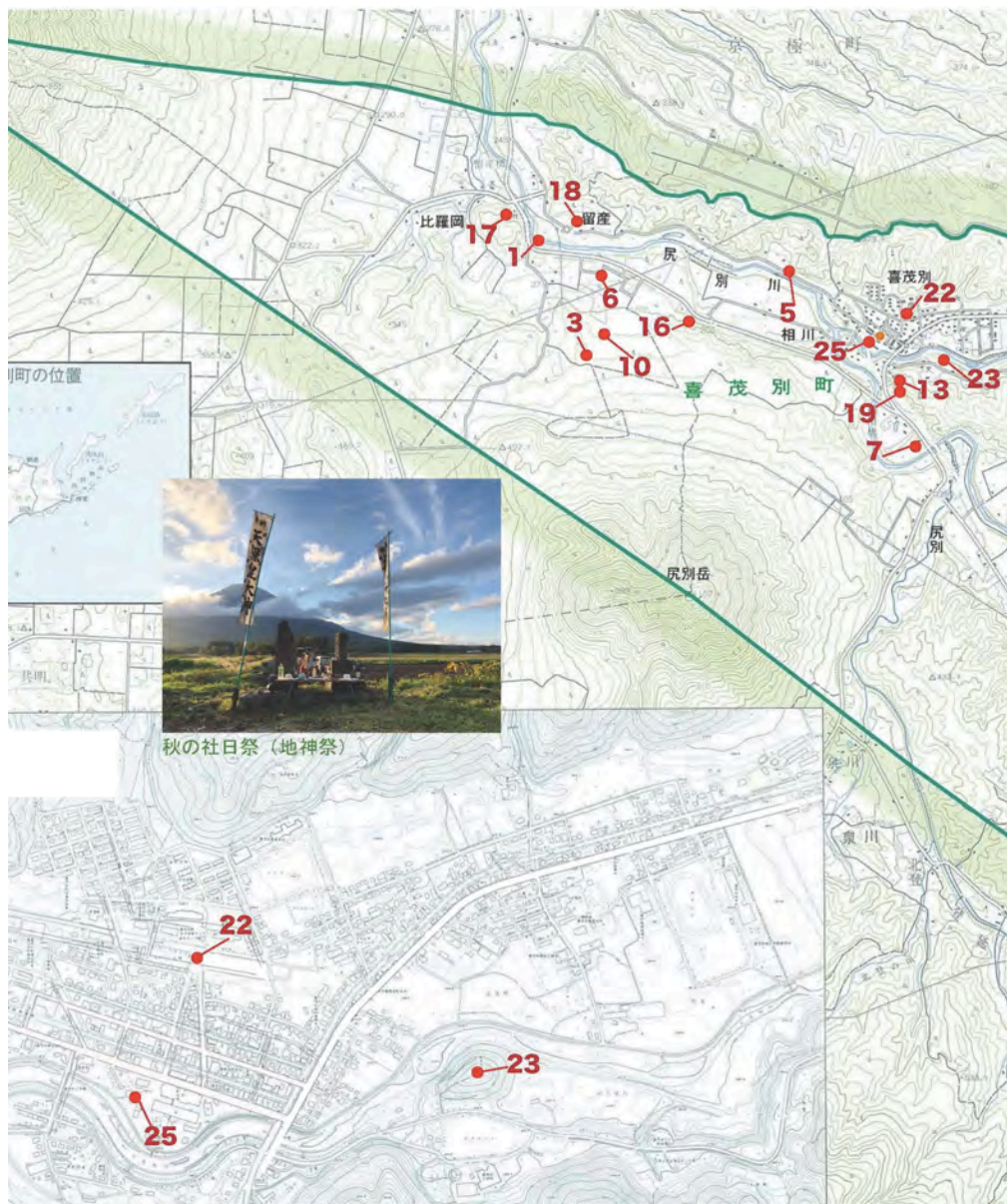
双葉や知来別、福島地区などに入植しますが^{14,15}、すでに良好な開墾地が残っていなかったため、彼らの多くは程なくして挫折し撤退しました。明治に進められた入植開拓の波が終わりを迎えつつあったのです。その大きな時代の変わり目を象徴するかのように、阿部嘉左衛門が1912(大正元)年に死去します^{13,16}。

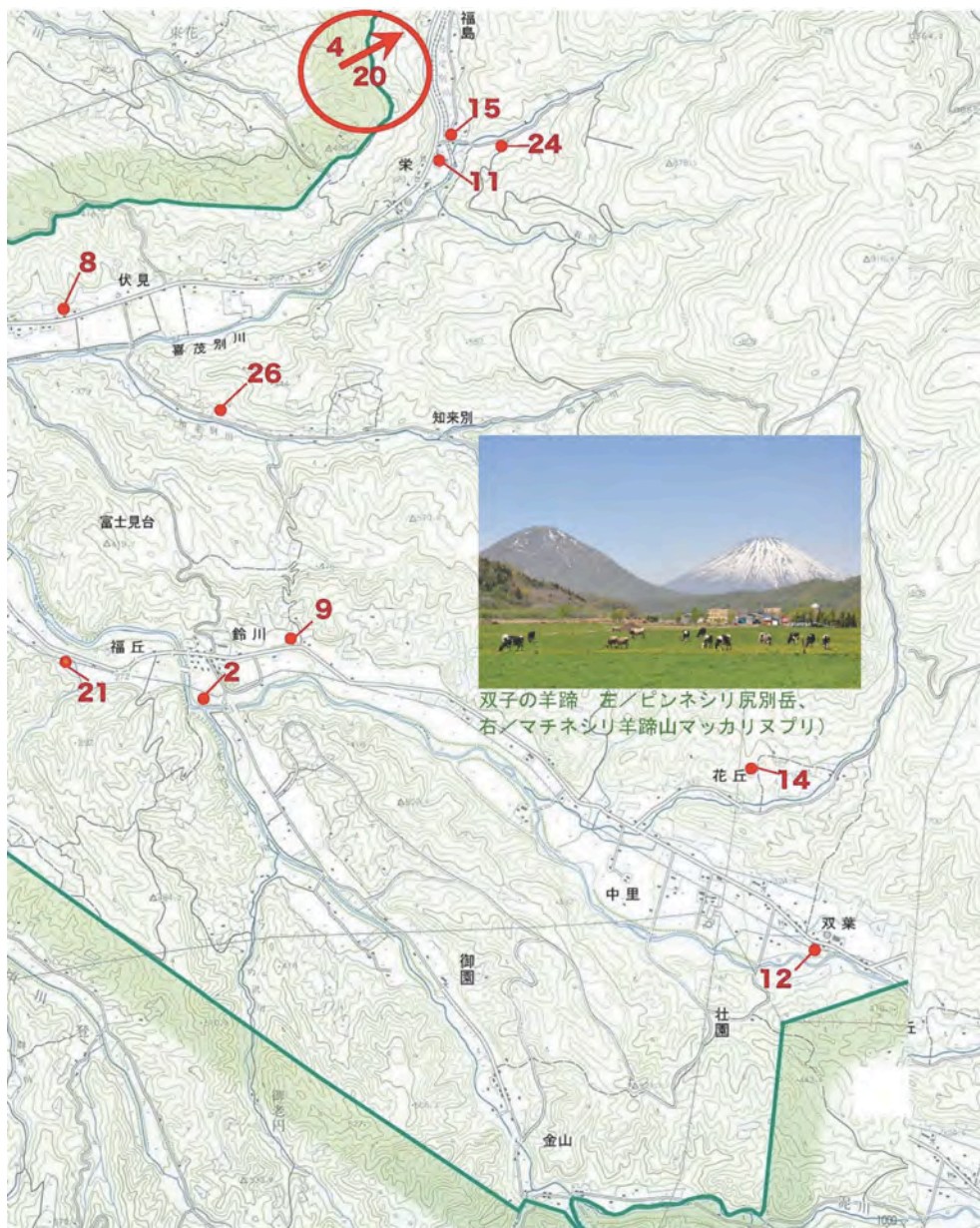
しかし、開拓農民はそれぞれの地区の特異性を受け入れた個性的な地域づくりを進めました。阿倍比羅夫伝説を受け止めた比羅夫神社¹⁷の建立や、アイヌと共に地域づくりを担った留産地区^{10, 18}、龍神信仰²⁰や庚申塚信仰²¹、お大師山²³など、地域住民の心の拠り所を大事にする新しい地域文化の息吹を感じさせる時代でもありました。そのような地域づくりを含みながら膨らみ続けた人口や産業規模を追い風として、それまで旧真狩村の一部だった喜茂別は、1917(大正6)年に分村して喜茂別村になります¹⁹。それまでの農業中心の産業構造は、栄鉱山²⁴など新たな産業基盤の開発を受けて、1928(昭和3)年には倶知安・京極間の鉄道が喜茂別まで延伸し²²、鉱物資源の輸送を中心に農産物や人々の交通なども活性化し、産業活動が飛躍的に発達します。

そのような時代背景の中で、喜茂別の農業にとって決定的に重要なホワイトアスパラガスの生産が上目名(比羅岡)地区を栽培発祥の地として広がりました。やがて日本一の生産量を誇るまでに成長し、傾斜地試験場²⁶の立地などもあって、またその加工産業²⁵も農民主体の仕組みとして設立されたのでした。

喜茂別歴史の旅は、この先の今日に向けてさらに続きます。地域の今と明日を考えるため、歴史探訪の旅に出かけましょう。

地図：きもべつ歴史散策の場所を探す





※ 番号の4と20は、地図からはみ出た場所にあります。

1 アイヌのサケの漁場（留産、相川）：明治以前

明治以前、ルサン（留産）からフルホク（相川）にかけての川筋は、尻別川随一のサケの漁場でした。松浦武四郎の日記によると、ルサンにもフルホクにもアブタアイヌやウスアイヌの漁小屋や丸木舟があって、漁の季節になるとアブタやウスからアイヌが来てサケ漁を行い、冬の前に持ち帰っていました。この漁場はかつてイソヤアイヌのものだったのですが、交渉の結果アブタアイヌとウスアイヌの漁場になった、と武四郎の記録に記されています。倶知安周辺の流域は、同じようにイワナイアイヌがイソヤアイヌから漁場を譲渡されました。👉資料編 P33

【参考文献】

- ・『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 報志利辺津日誌』（松浦武四郎著／1857(安政4)年）
- ・『新喜茂別町史（上巻）』（P53～57）



※写真：尻別川に至るアイヌの道三ルート（地図は、松浦武四郎の東西蝦夷山川取調図）

2 松浦武四郎が遡った最上流地点ヘタヌ（鈴川）：安政4年

1857（安政4）年、アブタとウスのアイヌの案内を得て尻別川の探索を行った松浦武四郎は、フルホクにあったアイヌのサケ漁小屋で丸木船二艘を借りて上流に遡り、ハキイチャン（尻別地区の辺り）で一泊した次の日徒歩で尻別川と支流オロウエンシリベツ川の合流地点ヘタヌ（鈴川地区）に着き、さらに上流の様子などを同行のアイヌから聞いたのちに、引き返しています。この地点が、武四郎が到達した尻別川の最上流地点です。

📖 資料編 P33

【参考文献】

- ・『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 報志利辺津日誌』（松浦武四郎著／1857(安政4)年）
- ・『新喜茂別町史・上巻』（P60）



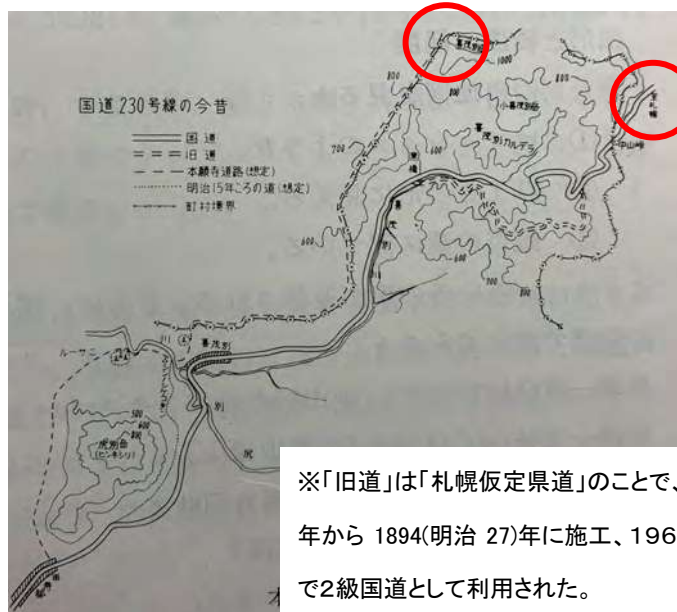
※写真：赤い点線は松浦武四郎が安政4年に尻別川流域を辿ったルート、青い点線は安政5年に内陸路を探索したルート(地図は『武四郎と尻別川』(NPO しりべつリバーネット作成 2001年より)

4 本願寺道路開削と中山峠（中山峠）：明治4年

現在の中山峠は国道230号の札幌市と喜茂別町の境にある標高836mの峠で、羊蹄山と尻別岳及び無意根連峰が眺望できる場所です。しかし、1870(明治3)年、東本願寺の現如上人(大谷光榮)が札幌から虻田に抜ける道路の開削を開拓使に願い出て許され、翌年開通した本願寺道路においては、現在の中山峠よりも西北の方角、石狩国と胆振国の国境にありました。本願寺道路も、現在の国道230号線や旧道(仮定県道)よりもずっと西側を通っていたのです。「中山峠」の命名は、開通後検分した副島種臣参議が「余市岳と札幌岳の間だから中山峠」と言ったのが始まりと言われています。👉資料編 P35

【参考文献】 ・『新喜茂別町史(上巻)』(P72~74)

・『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』(松浦武四郎著/1858(安政5)年)



※「旧道」は「札幌仮定県道」のことで、1885(明治18)年から1894(明治27)年に施工、1969(昭和44)年まで2級国道として利用された。

※写真:『喜茂別町史』P3の図「本願寺道路の移り変わり」

5 シンノシケコタン（相川）：明治4年

1870(明治3)年に東本願寺により開削が始まった「本願寺道路」は、尻別岳西側フルボッケの辺りで尻別川を横断していましたが、当時アイヌのサケ漁の小屋があったこの地を開拓使は「シンノシケコタン」と記しています。翌年7月開拓使長官東久世通禧、副島種臣参議ら35名が本願寺道路の検分に訪れ、シンノシケコタンで尻別川を渡ったと記しています。10月には開拓使長官の命を受けた旧仙台藩亘理領主伊達邦成が、阿部嘉左衛門、牛坂喜四郎、志賀条之進の三戸を、この地での開墾気候試験のために住まわせました。和人による喜茂別開拓黎明のこの地は、現在の相川辺りと考えられます。👉資料編 P35

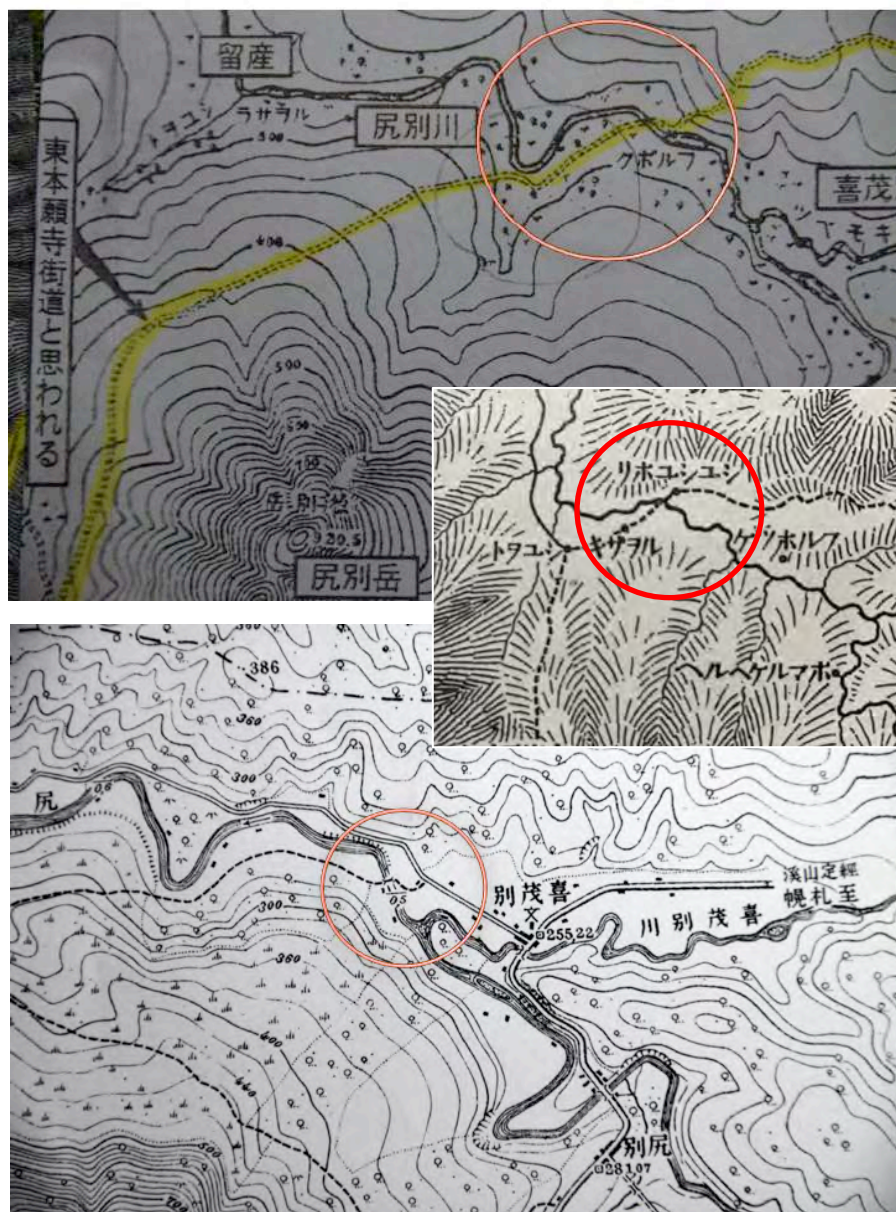
【参考文献】

- ・『喜茂別町史』（P29）
- ・『新喜茂別町史』（P71-74）
- ・東前寛治氏『ヌブリ』7号
- ・太細重秋氏『ヌブリ』8号
- ・古地図（M4、M26、M29、M4）
- ・『「シンノシケコタン」ってどこ？』（斎藤久）
- ・『移住者記録』、『朔北開闢誌』（伊達市開拓記念館編）、『伊達郷土史／黎明期』（菅原清三著）、『壬甲戸籍』（田村一彦編）、阿部嘉左衛門の失火報告書、志賀条之進・牛坂喜四郎の見分書等

※写真：(上)高見沢権之丞が表した本願寺道路の絵図の一部/1872(明治5)年

(下)本願寺道路が尻別川を渡る渡船場(シンノシケコタン(相川))『新喜茂別町史』掲載





※写真: 本願寺道路が尻別川を渡る辺りにシンノシケコタンがあったと想定できる古い地図(○印)

※上図は 1896(明治 29)年の地図を用いた森美典著『東本願寺道路の変化を地図で読む』より／下

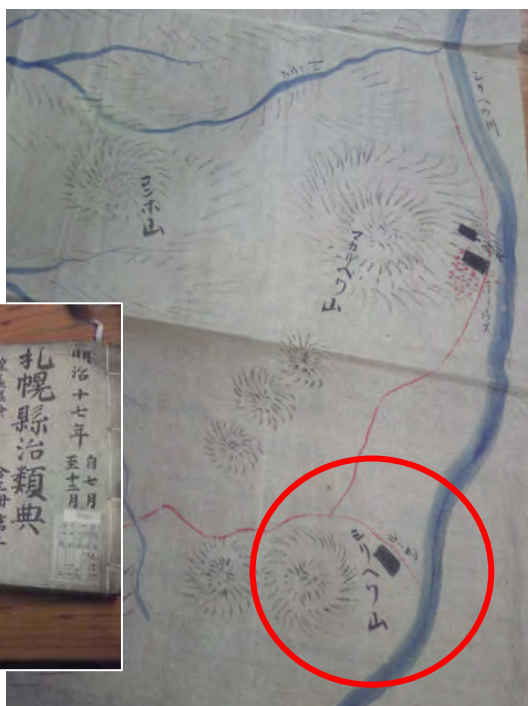
図は 1910(明治 43)年陸地測量部による地図／中図は 1893(明治 26)年陸地測量部による地図

6 バッタ塚 (留産) : 明治 13~17 年

1880(明治 13)年から 1884(明治 17)年にかけて、十勝平野で大発生したトノサマバッタが、日高山脈を越えて石狩から胆振、日高、そして後志へも襲来するという大災害がありました。一度飛来すると、農作物から牧草までまたたく間に緑の大地が褐色の荒野になってしまう被害がありました。そのため開拓使などは、多くの人を雇い 20 万円 (現在の約 9~20 億円に相当) もかけてトノサマバッタを駆除しましたが、それは海を渡って本州に被害が及ばないようにするのと、開拓事業を守るのが目的でした。バッタ塚は、幼虫や卵を埋めて駆除した場所で、ルサン(留産)やテウス(京極)にもありました。👉資料編 P36

【参考文献】

・北海道文書館の古文書「蝗虫駆除一
件／札幌縣勸業課」(M17) より



※写真: 右の図はルサンにあったバッタ塚の所在図(当時)／左の図はバッタ駆除に関する記録簿

7 喜茂別駅通所跡（尻別）：明治 24 年

これまで町史等に記されていた 1871 (明治 4) 年および 1875 (明治 8) 年の阿部嘉左衛門による「駅通」開業は、最近の調査研究により疑問視され、もっと後代になってからとの説が有力です。史実として確実なのは、1891 (明治 24) 年 6 月、現在の尻別 1 番地に阿部嘉左衛門が取扱人となって開設された、喜茂別で最初の喜茂別駅通です。この駅通も、1912 (大正元) 年に阿部嘉左衛門が死去し、翌年引き継いだ伏田勉は駅通を尻別 T 字路付近に移築しましたが、1926 (大正 15) 年に廃止されました。

👉資料編 P37

【参考文献】

- ・『北海道庁公報』1891 (明治 24) 年、
ほか
- ・『ヌプリ』7 号所収「嘉左衛門の駅通」
を語り継ぐ人たち」(梅田滋著)
- ・『ヌプリ』7 号所収「阿部嘉左衛門と
喜茂別駅通」(東前寛治講演録)
- ・『伊達の風土』(伊達郷土史研究会) 33
号・34 号所収「喜茂別開祖阿部嘉左衛
門と駅通の考察」(太細重秋著)



※写真：阿部嘉左衛門がアコーディオンを弾いている肖像写真(『室蘭大観』所収)

8 伏見稲荷神社（伏見）：明治 33 年

町内最古の神社で、明治 30 年代の初めに阿部嘉左衛門が京都の伏見稲荷神社から分霊を受けて、現在の喜茂別町立クリニック付近（喜茂別 11 番地）に創建したのが始まりです。その後 1900(明治 33)年に現在の喜茂別神社がある神社山に移設され、さらに 1903(明治 36)年に現在の場所（中喜茂別）に移りました。喜茂別神社が 1908(明治 41)年に創建されるまでは伏見神社が喜茂別村鎮守の唯一の社で、祭りも賑やかでした。現在、伏見神社の境内には拝殿がなく、社日碑や馬頭碑などと並んで小さな祠があります。👉資料編 P38

【参考文献】

- ・『新喜茂別町史／下巻』（P479～480）
- ・『広報きもべつ』2009年10月号(P9)



※写真：伏見神社（例大祭）

9 南部団体開拓の碑（鈴川）：明治34年

「南部」の呼称は青森県東部から岩手県北部に至る旧南部藩の領域地域の通称で、この地域から北海道への移民集団を「南部団体」と呼んでいます。喜茂別の「南部団体」は、連年の凶作から北海道に再生の道を求め、1901(明治34)年先駆けて入植した鈴木与助の導きにより、1902(明治35)年岩手県本宮村を中心に鷹羽喜太郎を団長とする5戸34名が当時の上尻別(現福里)に集団移住しました。碑は、1967(昭和42)年関係者により建立され、1981(昭和56)年現在地に移設されました。👉資料編P39

【参考文献】

- ・『新喜茂別町史／上巻』(P119～123、P200～201)



※写真：南部団体開拓の碑

10 先住民アイヌへの土地付与（留産）：明治 35～42 年

古来より喜茂別の尻別川沿い、特にルサン（留産）では、季節になるとアイヌの集落ができるほどサケ漁で賑わっていました。その後、1902(明治 35)年から 1909(明治 42)年にかけて、「北海道旧土人保護法」により現在の留産の土地約 70 町歩がアイヌ人 10 戸に付与されました。その多くはアブタとウスから移住してきたアイヌ人でした。当時の古老の話によると、鮭や鱒とりの名人、熊捕りの名人や立派な髭の男性、口にイレズミの女性もいて、熊祭りも見たといえます。半農半漁の生活をしていましたが、1923(大正 12)年に尻別川にダムが出来てサケ漁が出来なくなり、虻田方面に帰りました。地域の中で和人と一緒に生活していたアイヌの人々の名前は、留産地区地神の碑に刻まれています。（※18 留産地区地神の碑 P24 参照）

👉資料編 P39

【参考文献】

- ・『喜茂別町史』
(P36～40)、
- ・『新喜茂別町
史(上巻)』
(P177～183)
- ・『ヌプリ』4号



※写真：留産地区で農耕にいそむアイヌの人々（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）

12 ソークシュオマベツ駅逓所跡地（双葉）：明治42年

駅逓所は、開拓のため北海道に渡ってくる人や旅をする人、及び馬の宿泊所として、さらに郵便の業務も取り扱っていた北海道独特のものでした。ソークシュオマベツ駅逓所は、初代取扱人水沼菊三郎によって1909(明治42)年に開設され、1912(明治45)年長家国太郎に引き継がれ開拓に大きな役割を果たしましたが、トラック輸送の開始や喜茂別までの鉄道の開通により1934(昭和9)年に廃止されました。その後、駅逓の制度自体は1946(昭和21)年に廃止されます。ソークシュオマベツ駅逓所は北海道の開拓を知る上で貴重な建物であるため、1977(昭和52)年に「北海道開拓の村」に移築され展示されています。

👉資料編P40

【参考文献】

- ・ 宇川隆雄『北海道宿駅（駅逓）制の研究』など
- ・ 『新喜茂別町史／下巻』（P15～23）



※写真：ソークシュオマベツ駅逓所（北海道開拓の村に移築保存）

13 喜茂別馬頭観音碑（喜茂別）：明治44年

開拓期において馬の果たした役割は、極めて大きいものがあります。駅逡では交通と輸送、逡信のため、また、農家にとっては農耕と運搬のために欠くことのできない存在であり財産でした。馬頭観音碑は、馬の霊の安らかなる事を願うと共に、馬が病気にかかることのないように願うために町内各所に建立され祀られています。本町における馬頭観音信仰は大正初期ごろから次第に盛んになりましたが、喜茂別神社境内の馬頭尊碑は町内で最も古く、最晩年の阿部嘉左衛門が1911(明治44)年に建立したものです。👉資料編P41

【参考文献】

- ・『新喜茂別町史／下巻』（P505～507）



※写真：阿部嘉左衛門が建立した馬頭観音碑

（喜茂別神社境内）

14 山梨団体入植地跡（双葉、花丘、知来別）：明治 44 年

1911(明治 44)年 4 月前年の大洪水に見舞われた山梨県の人々が県の指示の元、この地に生きる道を求め総勢 253 戸 1,181 人※注が双葉、花丘、知来別地区に入植しました。入植地の南側は下壮溪珠と呼ばれて次第に発展し、神社、小学校、説教所、旅館、金物店、呉服店、とうふ店、桤屋等々がありました。やがて入植した人々は、あまりにも条件が悪い開墾地に見切りをつけ、御園地区に再入植した 13 戸など多くの人はこの地を去りました。花丘地区で白花豆の品種改良に生涯をかけた下山嘉吉氏の記念碑が、旧双葉小学校前に佇んでいます。👉資料編 P41

【参考文献】

- ・『ヌプリ』6号所収「双葉地区小史（1968(昭和 43)年末現在）」
- ・『新喜茂別町史／上巻』（P123～125、P133）



※写真 上：山梨団体の開拓小屋（『双葉地区開拓の歩み』1993 年発行より）



※写真 下：下山嘉吉翁の白花豆植栽発祥記念碑（旧双葉小学校前）

15 福島団体入植地跡（福島）：明治44年

1911(明治44)年、水害と連年の凶作により困窮しその再生を賭けた福島団体の89戸400人が、山梨団体に北接して4地区に分かれて入地したとされています。開墾地の条件が悪く開拓が容易でなく、その多くが数年のうちに転出しました。入植後20年を経過した1930(昭和5)年、入植した人々の労苦を偲び、記念碑を建立しました。👉資料編P43

【参考文献】

・『新喜茂別町史／上巻』（P133～135）



※写真：福島団体入植地碑

16 阿部嘉左衛門の墓（相川）：大正元年

阿部嘉左衛門は 1838(天保 9 年)年現宮城県に生まれ、1871(明治 4)年旧仙台藩亙理領伊達家の一員として紋鼈に移住。同年、旧領主伊達邦成が東久世通禧開拓使長官から命を受け、阿部嘉左衛門、牛坂喜四郎、志賀条之進三戸を喜茂別に開墾気候試験のために住まわせました。1873(明治 6)年に一旦紋鼈に戻った後、阿部嘉左衛門は 1891(明治 24)年尻別 1 番地に喜茂別駅通所を開設、明治 30 年代に伏見神社を創建、1911(明治 44)年には喜茂別神社境内の馬頭尊碑を建立するなど、本町の先覚指導者として活躍しました。1912(大正元)年 8 月 29 日 74 歳で没し、相川共同墓地上手中央に、夫人モモヨさんと一緒に葬られています。そして、そのすぐ横には、嘉左衛門の長女星鶴代と星房八が眠るもう一つの墓石が寄り添うように佇んでいます。

👉資料編 P43

【参考文献】

- ・『ヌプリ』7号所収「阿部嘉左衛門と喜茂別駅通」（東前寛治氏講演記録）

- ・『ヌプリ』7号所収「喜

茂別町開祖阿部嘉左衛門と

駅通の考察」（太細重秋著）

- ・『ヌプリ』7号所収「「嘉左衛門の駅通」を語り継ぐ人たち」（梅田滋著）



※写真：阿部嘉左衛門の墓（没後 100 年記念供養祭／2012 年）

17 比羅夫神社（比羅岡）：大正2年

659(斉明5)年阿倍比羅夫が蝦夷侵攻の際、後方羊蹄（しりべし）を政所（役所）とし、郡領を置いた、と『日本書紀』に記されています。幕末の探検家松浦武四郎は、日本書紀の記事内容から着想を得て『後方羊蹄山は、政所の古址（こし）である』と唱えました。1900(明治33)年、それを受けた河合篤叙が発掘調査を行い政所所在地であることを確信、1913(大正2)年、地元有力者であった稲村道三郎に呼びかけて比羅夫神社を留産原野の史跡台に創祀したとされています。その後、1931(昭和6)年に丸山頂上付近に移築され、1966(昭和41)年に現在地に移されました。👉資料編P44

【参考文献】

- ・『喜茂別町史』（P22～25、P141～143）、
「比羅夫神社由来」など
- ・『新喜茂別町史／下巻』（P484）



※写真：(上)初代比羅夫神社跡で行なった創建百年記念祭り(2013(平成25)年)／(中)比羅夫神社

由来(社殿内部)

18 留産地区地神の碑（留産）：大正5年

明治開拓期以来、民間信仰として故郷から伝承してきたものの一つに地神信仰があり、春と秋には祭りが行われ地域の様々な願いが寄せられています。留産の地神碑には、発起人・世話人記載の中に、建立された1916(大正5)年当時この地区に住んでいた3人のアイヌの人たちの名前も刻まれており、また、「天照大御神（あまてらすおおみかみ）」など五神の名の石柱と同じ台座に、「木花咲耶姫（このはなさくやひめ）」の名を刻み山神碑としても合わせて祀られ、馬頭碑を加えた二神一仏が祀られています。👉資料編P45

【参考文献】

- ・『新喜茂別町史／下巻』
(P502)
- ・『ヌブリ』1号所収「留産の
地神さん」



※写真：留産地区地神の碑

19 開村記念碑（喜茂別）：大正6年

1938(昭和13)年開村二十周年を記念して、喜茂別神社境内に開村記念碑が建立されました。

【碑 文】

大正六年四月胆振国真狩村ヨリ分村同時ニ二級町村制施行大正九年六月同国徳舜瞥村字字尾路園ノ一部合併昭和十三年八月経済更生特別助成村ニ指定同年九月全村字名改称並ニ地番整理ヲ実施セラレ永久記念トシテ之レヲ建ツ

👉資料編P46

【参考文献】・『新喜茂別町史／上巻』（P244-249）



※写真：開村記念碑(喜茂別神社境内)

20 黒沼と龍神沼（川上）：大正8年

「黒沼」と称される沼は二つあります。山の上の位置にある沼には、発見された頃には魚は一匹も見られませんでした。広さは約3反。「黒沼」の名称は近くにあった橋の「黒橋」にちなんだものです。1919(大正8)年、当時黒橋近くに住んでいた佐藤宇吉氏が沼のほとりで大蛇を見たという話から、心配した住民たちが相談の上龍神を祀ろうと三上末吉氏等が中心となり沼のほとりに黒沼龍神の祠を作り、毎年7月末に近くの住民により祭典が行われていました。その後干ばつの時には雨乞いをするると霊験があると言われ、留寿都、真狩方面から多数の人々が太鼓を鳴らしながら集まって雨乞いをするこゝもあつたと伝えられています。今は、住民もいなくなり、行われていません。

👉資料編 P46

【参考文献】

・『ヌプリ』1号初秋の「黒沼龍神」



※写真：(左)龍神沼／(右)黒沼龍神の祠

21 庚申堂（尻別）：昭和2年

建立の由来について、川口国雄さんのお話では「私の母をはじめ、付近には四国出身が多く、大正の頃から弘法大師を信仰していたが、四国に多かった「野の神さま庚申さん」も合わせて祀ることにし、1927(昭和2)年の秋に碑を建立し、後にお堂を建てた。」とあります。この庚申碑は正面上方に庚申（かのえさる）像を刻み、下方に猿田彦の使いである三匹の猿を彫っており、病気治癒等の祈願を行っていました。また、猿田彦は「道の神」とされていたので、道路工夫の信仰も集めていたという記録もあります。👉資料編P47

【参考文献】

- ・『ヌプリ』1号（前田克己氏編）P5～7



※写真:庚申堂

22 胆振鉄道喜茂別駅跡（喜茂別）：昭和3年

1919(大正8)年の倶知安から京極まで鉄道開通の後、倶知安の中村与三松氏の尽力により、胆振鉄道が1928(昭和3)年京極から喜茂別まで延長開通しました。念願であった開通で開村以来の祝賀行事が展開されたとあります(開通式当時の駅舎は現在の喜茂別保育所付近)。1941(昭和16)年喜茂別から伊達紋鱈まで延伸開通し、1944(昭和19)年国鉄に買収され国鉄胆振線となりました。その後、沿線の鉱山閉鎖や国道の整備とモータリゼーションの進展、地域の過疎化の進行などにより利用客が減少し、喜茂別開通以降58年の歴史を刻んだ胆振線は1986(昭和61)年11月に廃線となりました。👉資料編P48

【参考文献】

- ・『新喜茂別町史／下巻』（P72～83）



※写真:喜茂別駅での満州事变帰還兵歓迎の様子／1932(昭和7)年頃)

23 お大師山（喜茂別）：昭和5年

喜茂別小学校の前方の丸い山が「お大師山」といわれ、88体の石仏が迎えてくれます。昭和の初期、森芳太郎が霊示を受け、信仰のためお堂を構えたのが始まりとされ、その後川口貞吉、杉本直治らの世話人による祈祷所が設立されました。石仏は薬師如来、千手観音など14種でそれぞれに寄進者名が記され1930(昭和5)年建立とあります。頂上には小さな太子堂（聖徳太子像安置）が祀られています。👉資料編P49

【参考文献】

- ・『新喜茂別町史／下巻』（P495～499）



※写真：(上)千手観音像／(下)太子堂

24 日鉄鉱山跡（栄）：昭和 13 年

鉱山は、1904(明治 37)年、地域住民により発見されました。褐鉄鉱の採掘が始まったのは、34 年後の 1938(昭和 13)年。1941(昭和 16)年の胆振縦貫鉄道開通に合わせて、日鉄鉱業(株)が喜茂別駅まで専用軌道(6.6km)を布設し、露天掘り採掘し、室蘭製鉄所への鉱石輸送を開始しました。この時の従業員は 174 名を数え、1944(昭和 19)年までに約 30 万トンが採掘されました。その後、砒素の含有量が多いことから、たびたび休山を繰り返しましたが、研究が進められ、1949(昭和 24)年、焼結により鉱石から砒素を取り除くことに成功、脱砒焼結工場を建設して、採掘を再開しました。しかし、工場はコスト高となって経営が悪化、1953(昭和 28)年再び休山に追い込まれました。日鉄専用線は、1958(昭和 33)年に廃止となりました。

👉資料編 P49

【参考文献】

・『喜茂別町史』P318～327)、『新喜茂別町史／上巻』(P778～781)



※写真：栄鉱山跡

25 クレードル興農事務所（喜茂別）：昭和 13 年

1938(昭和 13)年、喜茂別産業組合は製造工場を設立し、アスパラガスの缶詰加工を始めました。1939(昭和 14)年、「アスパラガス栽培発祥の地」を表現する商標「クレードル」を意匠登録。1947(昭和 22)年 8 月、それまでの事業運営主体北海道農業会が GHQ により解散させられましたが、山麓 6 ヶ町村は山麓農村工業振興期成会を結成し事業を再開したものの、1948(昭和 23)年 5 月喜茂別大火により工場一切が灰となりました。その後工場を建て直して翌 24 年から製造を再開し、アスパラガスをヨーロッパ等に輸出して次第に大きくなり、1957(昭和 32)年に創業以来の商標クレードルを社名としてクレードル興農株式会社と変更しました（代表取締役社長丸子斉氏）。1968(昭和 43)年 6 月不渡手形を出して更生会社になり、現在は喜茂別、伊達、三川工場でアスパラ、スイートコーン、南瓜、各種スープなどを製造しています。👉資料編 P50

【参考文献】

- ・『喜茂別町史』（P262～276）、
『新喜茂別町史／上巻』（P712
～736）



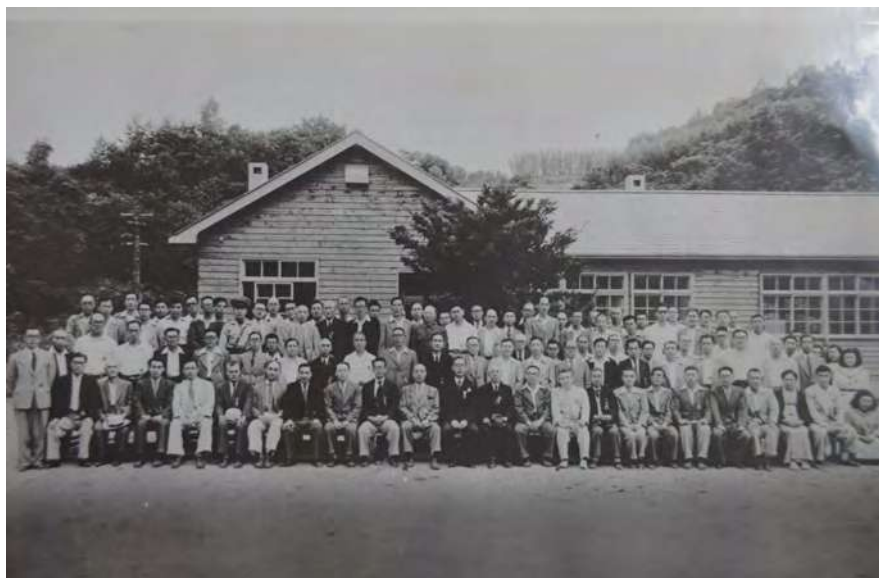
※写真： 大火再建後のクレードル興農株式会社工場の全景(当時のカレンダーから複写)

26 傾斜地試験場跡（知来別）：昭和 23 年

北海道農業試験場喜茂別傾斜地試験場は、1948(昭和 23)年喜茂別村知来別に建設され、翌年より試験事業を開始しました。目的は、傾斜地の土壌浸食防止と地力維持増進の基礎研究をし、営農の安定化を図ることでした。この研究成果は検討、改正を重ねられ、成果をあげました。その例として、傾斜地の縦畦耕作を止め、横畦・等高線栽培にしグリーンベルトの造成により、表土流出を防いだことなどがあります。また、種子の更新、耕作肥培、消毒管理等により増産の実績をあげましたが、1963(昭和 38)年にその業務を終えました。👉資料編 P53

【参考文献】

・『新喜茂別町史／上巻』（P545～548）



※写真： 傾斜地試験場全景と職員等関係者（1951(昭和 26)年 8 月 6 日開庁式）渡辺敏雄氏提供

資料編 1：もっと詳しく調べる

※本文を補う「余話」として、出典を元に説明を加えます。

1 アイヌのサケの漁場（留産、相川）：👉P6

● 尻別川の漁区に関するアイヌの取り決めと、和人による違法なサケ漁
尻別川を探検した時、松浦武四郎は同行したアブタアイヌ、ウスアイヌから聞いた話として次のような記録を残している。

尻別川は元タイソヤアイヌの漁場だったが、上流がサケの宝庫であることを発見したアブタアイヌとウスアイヌの先祖がイソヤに赴いてイソヤアイヌと交渉し、イソヤから船で遡ることのできる範囲の上流、険しいプイラ（渦巻・激流ポイント）に遮られるところから上流を、アブタアイヌとウスアイヌの漁場として譲ってもらった、という。そこで、ルサンから下流に下りて険しいプイラがあるホロイチャン（京極）のあたりまでをアブタアイヌとウスアイヌの漁場とした。以降、この取り決めが守られてきたが、イソヤに入り込んだ和人がこの掟を破ってサケが上流に登れないように留網を仕掛けたことで上流のサケ漁に支障が生じていることがアイヌから武四郎に訴え出られ、武四郎もその真偽を明白にしたいという目的も兼ねて、安政4年の尻別川の探索が行われたのである。この探索によって、武四郎ら一行は、禁じられていた留網による和人のサケ漁の跡を昆布付近で発見し、その措置をイソヤ到着後スツツの役所に申し入れている。

・『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 報志利辺津日誌』（松浦武四郎著／1857（安政4）年）

2 松浦武四郎が遡った最上流地点ヘタヌ（鈴川）：👉P7

● アイヌの移動交通の要路だったヘタヌ

ヘタヌで、武四郎は同行したアイヌから、この周辺は野生動物が多いのでシ

コツアイヌの狩猟の場になっていること、アブタアイヌが西蝦夷地へ出稼ぎなどに行く際には、このヘタヌの二股付近から山越えしてサッポロ、ハッシャブ（発寒）、オタルナイ（小樽）、アツタ（厚田）方面に出るという話を聞き、日誌に記している。この地点が、各地のアイヌにとっては徒歩による移動交通の要路の一つであったことがわかる。

・『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 報志利辺津日誌』（松浦武四郎著／1857（安政4）年）

3 後方羊蹄（しりべし）社趾（留産、比羅岡）：👉P8

● 羊蹄山と尻別岳の間の地を「後方羊蹄（しりべし）」と考えた武四郎
松浦武四郎は、1857（安政4）年の尻別川探索、1858（安政5）年の内陸道路の探索の2回にわたって後方羊蹄山（しりべしやま）の裾野を通っている。その両探索に先立つ1856（安政3）年、武四郎は箱館奉行所に対して一つの建言を呈している。それによると、この地が『日本書紀』が記した「後方羊蹄（しりべし）」であるとの推定を前提として、後方羊蹄山は蝦夷ヶ島の中央にあり、将来は山麓を開拓してそこに政府を置くことが望ましいと考え、各地からそこに至る5つの道の開削を提案している。その構想を実現したいという強い思いが、後方羊蹄社の祝詞にも表現されていた。構想はそのままの形では実現しなかったが、一部は実現している。その後方羊蹄社趾と思われる場所に、河合篤叙が地域住民と共に最初の「比羅夫神社」を建立した。その跡地に、2013（平成25）年、神社建立百年を記念して地元住民有志が史碑を設置している。

・『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 報志利辺津日誌』（松浦武四郎著／1857（安政4）年）

・『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』（松浦武四郎著／1858（安政5）年）

・『祭後方羊蹄社の祝詞』（松浦武四郎／1858（安政5）年）

・『喜茂別町史』（P25～26）、『新喜茂別町史（上巻）』（P62～65）

4 本願寺道路開削と中山峠（中山峠）：👉P9

● 本願寺道路の基になった古来からの道

本願寺道路の元となった、松浦武四郎がアイヌに導かれて1858(安政5)年に踏査した踏み分け道は、既に遠い昔からあった獣道のような状態であった。武四郎以前にも、その道を辿った踏査の記録がある。1751(宝暦元)年石狩川から豊平川沿いに定山溪、中山峠を越えて虻田に出た飛騨屋久兵衛は、その著『石狩山伐採地図』にその道路のあったことを記入しており、1807(文化4)年近藤重蔵もまたこの道を踏査した。

・『喜茂別町史』(P29)

5 シンノシケコタン（相川）：👉P10

● 阿部嘉左衛門派遣先の記録に登場する「シンノシケコタン」

阿部嘉左衛門ら三家族が派遣された地「シンノシケコタン」に関する記録は、1871(明治4)～1873(明治6)年の間だけ史料が存在する。それらは、次のとおりである。この地名は以降の文書には登場しない。その理由は諸説あるが不明である。(※太細重秋著／伊達郷土研究会『伊達の風土』33・34号「喜茂別町開祖阿部嘉左衛門と駅通の考察」より)

①明治四年二月、第三回移住者阿部嘉左衛門一家七名は紋鼈村松ヶ枝に入るが、九月に志賀条之進や牛坂喜四郎、アイヌ人三戸とシンノシケコタン（喜茂別）へ転居した。この史実は『伊達町史』『伊達郷土史』（昭和五十七年十一月発行）などに記されている。

②紋鼈村役所『明治辛未四年日記』の九月二十六日に「牛坂善次郎（喜四郎）阿部嘉左衛門シンリノシケ江早速移住心掛被仰付候事」、二十九日に「志賀条之進シンノシケコタン江早速移住心懸被仰付候事」とある。

③伊達邦成は遺稿『膽振國有珠郡開墾顛末』で、重臣三戸の移住経緯を「虻

田郡後方羊蹄山下ハ歳齋明帝ノ御宇、阿倍の比羅夫政所ヲ置ク舊趾タルヲ以テ、氣候試験ノ爲メ移住貫屬中ノ三戸ヲ選ミ、後志、河西字士氣古胆潭ニ移住セシム。」

- ④明治六年二月、開拓使室蘭詰（出張所）は嘉左衛門等の本願寺道開通後の通行量や氣候・地形地質などの報告を受けて、岩村大判官へ「有珠新道筋虻田郡内字新繁古潭江移民之儀ニ付奉伺候書付」の標記で「辛未年従有珠至札幌本願寺下手之新道筋字新繁古潭江追々新道御盛聞可相成御旨ヲ以駅場御建設之為伊達邦成方江御達有珠移民三戸土人三戸被相移扶助相成・・・（略）」
- ⑤翌月、開拓使庶務課が大判官に宛てた文書にも、「字新繁古潭江駅場御所設のため移民六戸御相成候所今般別紙之通室蘭詰より請状申立候趣・・・」
- ⑥同年九月の開拓使刊『部類抄追録』の「虻田郡開墾畑反数調」に「八反五畝部此は移住三戸後志新繁古潭の分」とあり、・・・（略）
- ⑦志賀条之進・牛坂嘉四郎が提出の「御見分書」は、次の通りです。「後志羊蹄新繁古潭移住 開拓使貫族 火元 安倍嘉左衛門・・・（略）」
- ⑧嘉左衛門の失火報告書や志賀・牛坂の見分書を受けた室蘭詰は、焼失経緯を開拓使庶務課へ報告する。「先規之通於刑法掛為取調候様可仕哉相伺候也虻田郡内後志羊蹄新繁古潭おいて居小屋消失仕候儀御届申上候書付・・・（略）」

・『「シンノシケコタン」ってどこ？』（斎藤久）

・太細重秋氏『ヌブリ』8号

6 バッタ塚（留産）：👉P12

● 牛坂喜四郎も従事したバッタの駆除

バッタ塚に関して、興味深い史料がある。1871（明治4）年に阿部嘉左衛門と

ともにシンノシケコタンに分住した一人牛坂喜四郎が、1882(明治 15)年に
蝗害発生時の「蝗害駆除関係書類」のなかに登場している。(下記)

「蝗虫駆除経費渡帳

五月十日 一、金貳拾六円五拾銭 牛坂喜四郎 印

鈴木春花 印

内 金拾壹円貳拾銭 四月但シ四月十七日ヨリ

三十日迄兩人分 (以下略)」

・伊達市開拓記念館「亙理藩伊達家資料」

・東前寛治講演記録から(『ヌブリ』7号/KHP/H25.5)

7 喜茂別駅通所跡(尻別): 📍P13

● 明治4年の「駅通」はなかった

これまでの喜茂別町史では、阿部嘉左衛門他二名が東久世開拓使長官の意を受けた伊達邦成の命によりシンノシケコタンに入植し「駅通」を開業した、とされてきた。『喜茂別町史』(P53-56)『新喜茂別町史』(上/P74-76)のいずれも、そのように記している。しかし、最近の詳細な研究の結果、明治4年にシンノシケコタンに入地した阿部嘉左衛門、牛坂喜四郎、志賀条之進らの目的は「駅通」とはいえないことがわかってきた。その研究とは、東前寛治氏、太細重秋氏のそれぞれの研究である。

東前寛治氏は、「駅通」制度の変遷に関する時系列の詳細な分析に基づいて、「このような駅通の役割とその変遷を見ても、1871(明治4)年の喜茂別入植は「駅通」というよりは、内陸部開拓試験のニュアンスがより強く感じられてならない」と述べている。(東前寛治氏の講演/『ヌブリ』7号所収 P33)
また太細重秋氏も、1871(明治4)年に設置されたのは「駅通」ではなく「駅伝」と称される機能であったとし、「嘉左衛門が「開拓使専用人足」に任せ

られて本願寺道路を經由し、公用状などを運んだ駄伝である」と著している。(太細重秋「喜茂別開祖阿部嘉左衛門と駄通の研究」／『ヌプリ』8号所収 P11)

いずれも、「駄通」ではないとする点で共通している。

しかし、では「駄通」ではないとしてそれはどのようなものか、ということになると、両氏の説は異なっている。

東前寛治氏は「休泊所としての小休処」、太細重秋氏は「公用状を運ぶ駄伝」とであると主張している。

いずれにせよ、明治4年にシンノシケコタンに設置されたのは、「駄通」という機能を十分に満たしてはいない施設であった、ということになる。

なお、P13の阿部嘉左衛門の写真は、『室蘭大観』に掲載されていたもので、アコーディオンを弾いている姿が印象深い。

- ・『ヌプリ』7号所収「阿部嘉左衛門と喜茂別駄通」（東前寛治講演録）(H25.5 発行)
- ・『ヌプリ』8号所収「喜茂別開祖阿部嘉左衛門と駄通の考察」（太細重秋著）(H28 年発行)
- ・『室蘭大観』（M42 発行）

8 伏見稲荷神社（伏見）：👉P14

● 阿部嘉左衛門のエピソードが伝わる伏見神社の奉遷

伏見神社を神社山から現伏見地区に奉遷した1903(明治36)年の際、阿部嘉左衛門はほとんど失明状態だったが、大衆の前で居合術を実演したといわれ、若衆による「仙台神楽」も奉納された。山の上から現在地へ本社殿が奉遷されたのは、1975(昭和50)年ごろという。1993(平成5)年に、企業の寄贈により赤い鳥居が建立され、今の佇まいに至っている。

- ・『新喜茂別町史／下巻』（P479～480）

9 南部団体開拓の碑（鈴川）：👉P15

● 南部団体入植の歴史的経緯が鈴川の地名に込められた

「私の父鈴木与吉は、1901(明治 34)年の旧三月に、一家を引き連れて、今の伏見へ吉田孫太郎氏をたよって移住しました。その年の秋に、・・・(中略)・・・父は藤原長次郎氏や吉田又蔵氏と共に、5 円の金を用意し、これを旅費として、丸子源吉氏に依頼して、岩手県まで団長の鷹羽喜太郎氏を迎えにってもらった。鷹羽氏が渡道して、室蘭支庁へいったところ、すぐ許可になり、ここに南部団体の入植が実現した。そして私たち南部団体は、昔の上尻別、今の福里へ入植しました。」(「回顧」談／鈴木善吉)『ヌプリ』3 号より転載)

現鈴川の地区名は、南部団体移住の先駆者である鈴木与吉の功績を称え、「鈴」の字を冠したものである。

・『新喜茂別町史／上巻』(P119～123、P200～201)

10 先住民アイヌへの土地付与（留産）：👉P16

● 尻別川随一のサケの漁場で営まれたアイヌと和人の混住地

松浦武四郎の『丁巳日誌』(1857(安政 4)年)によると、尻別川の喜茂別流域では、相川から留産にかけて 8 箇所 14 人のアブタアイヌ、ウスアイヌの漁場があって、サケの季節になるとアブタやウスからサケ漁のためにその季節だけ滞在するコタンがあったという。

1885(明治 18)年虻田からアイヌの野附近之助が留産に移住したことをきっかけとして虻田の妻木武平ら数戸のアイヌが移り住むようになり、留産にコタンを形成した。1899(明治 32)年には北海道旧土人保護法が施行され、留産居住のアイヌ達には 1902(明治 35)年から 42 年にかけて土地が無償付与された。中でも妻木武平一族や嵐イカシレキテは 8～18 町歩という土地付与を受けて税金も納め、地域の開拓にとって先駆的な役割を果たしながら

ら留産部落の中で和人と共に暮らしていた。1921(大正 10)年には喜茂別村に 7 戸 32 人が居住、1933(昭和 8)年には 1 戸 5 人が居住との記録がある。

- ・『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 報志利辺津日誌』(松浦武四郎著／安政 4 (1857) 年)
- ・『喜茂別町史』(P36～40)、『新喜茂別町史 (上巻)』(P177～183)
- ・『ヌプリ』4 号

11 三宅伊勢松頌徳碑 (栄) : 🏠P17

● 上喜茂別駅逋の初代取扱人

三宅伊勢松氏の功績の一つに、上喜茂別駅逋の開設がある。1912(大正元)年に業務を開始した初代取扱人であったが、二代目取扱人は三宅農場を譲渡した岩崎昌彦氏、三代目は松井隈次郎氏が引き継いだ。位置は旧栄郵便局の向かい側にあり、1931(昭和 6)年に廃止された後も 1964(昭和 39)年まで建物は残存していた。

- ・『新喜茂別町史／下巻』(P15)

12 ソークシュオマベツ駅逋所跡地 (双葉) : 🏠P18

● 北海道開拓の村に永久保存

北海道開拓期の貴重な建物を復元保存し一般客の見学に供している「北海道開拓の村」には、駅逋所では唯一「ソークシュオマベツ駅逋所」が展示されている。この経緯については、次のように記されている。

「本駅逋所は、全道的に見ても貴重な歴史遺産であり、本町の史跡であったが、北海道開拓の村に移設して、永久保存することが決まり、1977(昭和 52)年 7 月、解体収集工事が開始され、同年 8 月に工事は完了した。その概要については、「長家家資料目録」(北海道開拓記念館・昭和 59 年発行)に詳述されている。・・・(中略)・・・復元工事の概要・・・(中略)・・・駅逋所は整備が

整った 1912（明治 45）年時点の状況に復元し、亡失した厩舎は、1915（大正 4）年建築の規模を再現することとした。」

・『新喜茂別町史／下巻』（P15～23）

13 喜茂別馬頭観音碑（喜茂別）：👉P19

● 開拓の歴史を支えた馬頭観音碑

馬頭観音信仰は、「当初、山神信仰と混じり合った形で進められている。本町所在の馬頭碑（所在地＝比羅岡、留産、相川、富士見台、双葉、喜茂別、栄、知来別）は、山神碑の近傍に併設されているものが多い。これらの信仰も山神信仰と馬頭信仰にそれぞれ分化し、独立した行事を行うようになる。馬頭の祭りを初午（はつうま）の日に行う例が多い。初午といえは、一般には稲荷の祭日として知られている。初午は二月上旬で、その年のはじめての午（うま）の日で、この日は山仕事はすべて休み、馬にも休みをとらせて、馬の息災を祈った。」『新喜茂別町史／下巻』（P506）

14 山梨団体入植地跡（双葉、花丘、知来別）：👉P20

● 水害被災民の北海道集団移住

集団移住先については、当初、朝鮮への移住案（山梨県農会）と北海道への移住案（山梨日日新聞）の両案が対立する経緯もあったが、その後北海道移住の方向が有力となり、道内移住地選定のため先遣隊が来道、富士山に山容が似ている羊蹄山周辺を入植地として選定したという。しかし皮肉なことに、北海道移住案の有力な根拠とされた「国有未開地処分法」の制定によって、それまでの「開墾成功後の土地払い下げ」が「土地付与制度」に変更されたことで開墾への誘引がよりいっそう高まり、大農場への投資が投機的な土地漁りに結びついて、不在地主の増加や小作人の大量輩出を招き、自作

農が一層困難になっていた。つまり、山梨団体の北海道移住案の優位性を根拠づけた「国有未開地処分法」制定は、むしろ団体入植の可能性を狭める結果を既に招いていたのである。

2009(平成 21)年、山梨県甲府市から、山梨ことぶき勸学院・大学院の6名の方が、山梨団体の移住状況を調査するため、俱知安町、豊浦町、そして、喜茂別町に来られ、関係者からの聞き取りや現地踏査などを行なった。その結果は、報告書『平成 21 年度調査研究報告書「年輪」』として発行され、喜茂別で対応した人にも送られてきた。その中の総括的な論文「明治の大水害被災者の北海道集団移住を追う」から重要と思われる指摘部分を引用する。

「北海道のなかに、山梨の地名を持つ地域が6ヶ所もあることを、ご存知ですか？しかも、場所は蝦夷富士と云われる「羊蹄山」をぐるりと囲むように、その山麓に存在するのです。1907(明治 40)年と 1910(明治 43)年の二度に渡る未曾有の大水害を受けた山梨県の被災民 660 戸 3,130 余名は、国と県を挙げての勧めに応じて集団移住を果たした。その入植地に郷里・山梨の名を命名したのでした。しかし、その地が現在も農耕地として機能し、村として今も住居が続いているところは、羊蹄山南麓の豊浦町の二つの地域のみとなり、東麓と北麓の4つの地域は原生林へと帰してしまった。はたしてこの集団移住に何があったのであろうか？」(上掲書から)

「明治の大水害被災者の北海道集団移住を追う私達の旅は終わった。水害によって土地を失った被災者を確実に救済することは国や県当局の緊急課題であり、移住の取り組みの熱意に表裏はなかったと思われる。新地の開拓の夢は叶わず、移住民は離散した。直接の原因は山奥地、寒冷地の自然に勝てなかったからだ。移住地の選択理由が「富士山によく似た羊蹄山の見える場所へ」とは、子供じみていてにわかには信じられないでいた。移住の場所よりも年内の土地争いを避け、確実に口減らしを選択したとも思えたから

だ。しかし、北海道の山梨の地を訪ね、何日か羊蹄山を仰いでいるうちに「羊蹄山麓を選んだ」のは、あながち嘘ではないかもしれないなあ、と、ふと思えたりした。移住を取り巻く当時の状況や背景は謎のままだが、100年にもなる明治の大水害と北海道集団移住は、過去の出来事として風化しつつある。わずかに甲府城跡の高地に立つ謝恩塔が「あれはなんですか？」の会話で過去の出来事を呼び起こしてくれている。」(上掲書「おわりに」から)

・『平成 21 年度調査研究報告書「年輪」』

15 福島団体入植地跡（福島）：👉P21

福島団体は、1911(明治 44)年に、本町だけでなく東俱知安村カシブニ（現京極町錦地区）にも、42 戸 115 人が入植している。

・『新喜茂別町史／上巻』（P133～135）

16 阿部嘉左衛門の墓（相川）：👉P22

●法名に見る阿部嘉左衛門

墓石の表面碑文は「嘉猷院覺翁玄防居士 澍心院正妙真大姉」と彫られており、前段は嘉左衛門の、後段は嘉左衛門夫人モモヨの法名（戒名）である。この嘉左衛門の法名については、百年忌の法要を執り行った北禅寺の住職富田道紹氏の解釈が示されている。

「墓石に刻まれている嘉左衛門さんの戒名は、嘉左衛門さんの人生がこの地と分かち難く結びついていたのであることを示しているようだ。最初の2文字「嘉猷（かゆう）」は「良き道」という意味で、本願寺道路沿いに入植した嘉左衛門さんの人生そのものを讃えている。末尾の「居士（こじ）」の前の2文字「玄防（げんぼう）」は、「道の奥深いところで邪悪なものから人を守る」という意味で、これは「馭遁」を指しているとの解釈もある。「道」

と「駅通」によって人を支える営みが、嘉左衛門さんの人生そのものであった、と語っているように思える。」（『ヌプリ』7号）

・『ヌプリ』7号所収「嘉左衛門の駅通」を語り継ぐ人たち（梅田滋著）

17 比羅夫神社（比羅岡）：👉P23

●比羅夫神社の社殿内の「比羅夫神社由来」から。

齊明の朝五年三月

阿倍引田臣比羅夫

蝦夷の国を討ちて

肉入籠（ししりこ）に至りし時

問菟（という）の蝦夷

膽鹿嶋（いかしま）・菟穂名（うほな）の語（こと）に随ひ

郡領（こほりのみやつこ）を後方羊蹄（しりへし）に置く

この書紀の故事を慕って

しりへしの地を訪うもの

大探検家 松浦武四郎

開拓使長官 東久世通禧

参議 副島種臣

郡長 田村顕允 等々

熱血の教育家河合篤叙もその一人

現地に鋤を振るって

茫々の茅原に遺跡を探索

史蹟台の碑を立てて時人に説く

すなわち、大正二年この史蹟台に

比羅夫神社が創建せられた

また、現丸山に聖域を相して
 奉遷せられたのは昭和六年
 やはり、河合篤叙の勧告による
 この地、羊蹄、尻別二峰を背景に
 三段のテーブルランドを展開し
 尻別の清流ゆきて休むなし
 回顧すれば一千三百余星霜
 阿倍比羅夫の霊 厳かに静まる

昭和四十四年九月十五日 選文并書 栄花喜久男 六十五歳

奉献者 行天慶太郎 八十六歳

・「比羅夫神社由来」

18 留産地区地神の碑（留産）：👉P24

●留産地区二神一仏の碑の由来

設立の由来に関する栄花幹二氏の談によると、「1910(明治43)年1月16日、その頃ルサンに住んでいた斎藤石五郎氏（もと本町の町会議長であった斎藤末藏氏の父親）は、柳川さんの澱粉工場のあるあたりの裏山で、伐木作業をやったところ、不幸にも木の下敷となって亡くなられた。留産部落の栄花岸太郎氏等發起人となり、斎藤氏の慰霊を兼ねて、山神を祀ろうということになった。山神として木花咲翁姫命を、ついで農神として地神され、さらに馬頭さんもということで併せて二神一仏をこの敷地に祀ったのである。」

（『ヌプリ』1号／前田克己著）

なお、碑文に掘られた住民の氏名のうち、妻木武平、嵐イカレシキテ、藤野キクブシドは、この地に居住していたアイヌである。

・『ヌプリ』1号所収「留産の地神さん」、『新喜茂別町史／下巻』（P502）

19 開村記念碑（喜茂別）：👉P25

●喜茂別分村を記念して

山梨団体の入植などによって1911(明治44)年以降喜茂別の人口は大きく伸び、真狩村(役場所在地・留寿都)からの分村論議が地域の有力者の間で交わされるようになった。1912(明治45)年4月30日の村議会では喜茂別分村が議決されるに至ったが、鹿島真狩村長は時期尚早と判断し、応じなかった。その鹿島村長が1915(大正4)年に他地へ転任し後任の村長に打越万二が就任すると、分村問題が再燃した。その後の議論の中で村界や財産分割の議論が具体化し、結局、1917(大正6)年4月1日付で真狩村から喜茂別村が分村独立し、二級町村制を施行した。

・『新喜茂別町史／上巻』（P244-249）

20 黒沼と龍神沼（川上）：👉P26

●祠を再発見

平成22年、当時の山本宮司を中心に住民有志で4月のまだ雪深い固雪の時期にお参りに行ったことがある。現地を知っている福島地区在住の梅津さんが案内してくれたが、この辺にあるはずだと言う場所で、祠を掘り出すために持参したスコップで周辺の雪を掘り起こしたが、結局見つけることができず、おおよその場所を想定してお詣りをした。その1ヶ月後くらいに、再び町民有志で訪れ、ほぼ消えかかっていた雪どけの水に洗われたような清冽な印象の祠を見いだすことができた。

上の沼の北側にある龍神堂は、7～80cmくらいの高さの石造りの小さい祠である。その側面には、次のような刻銘があった。前田克己さんの『ヌプリ』1号の記事から引用する。

●向って左側面

氏子総代 三上末吉

取締役 三上喜六

発起人 牧野一、佐藤宇吉、阿部寅吉、岡本喜平、管野留治、山岸庄
作、山本竹治

●裏面

小泉芳蔵、長南包次、佐々木勇、池田貞五郎、柳沢秀次郎、及川茂七

●右側面

俱知安村・ 泉正次、佐藤丑太郎、荒小三郎、東 作、東 、
樋 七五郎、清水市作 大正八年九月二十五日

・『ヌプリ』1号初秋の「黒沼龍神」

21 庚申堂（尻別）：👉P27

●庚申塚の信仰のいわれ

庚申塚の信仰について、相馬教会服部正栄氏の解説が、『ヌプリ』1号（前田克己編著）に紹介されている。

「庚申さんのご神体は猿田彦命です。ご存知のように天孫降臨の時、道案内されたお方、お祭りのお神輿の先頭に高足駄をはいた天狗さんのことです。従って猿田彦さんは「道の神」として庚申塚は三叉路に祀るのが普通であります。また、三匹の猿ですが、猿は猿田彦さんのおつかいであります。三猿は、「見ザル、聞カザル、言ワザル」つまり、不浄を見ず、聞かず、言わずという意味です。この庚申を祀った尻別の人々は、そういう深い意味を知らず故郷の村の風習にしたがったものと思います。毎年、9月と4月の庚申の日（カエサル）にお祭りを致します。穴の空いた石は、耳、鼻、目などの病がなおるように祈願するとき奉納します。布のぬいぐるみは、やはり人形であって、願主の身代わりを意味するものです。道の神というところからか、

道路工夫さんたちが、よくお堂で休んだり、お参りしたりしているのを見かけました。昔はお祭りの時、子ども角力などもやって、なかなか盛大なものでした。」（『ヌプリ』1号／前田克己著）

22 胆振鉄道喜茂別駅跡（喜茂別）：👉P28

●歴史の光と陰を貫いて走った胆振線

1922(大正 11)年 4 月に交付された「鉄道敷設法」の中で、北海道「胆振国京極カラ喜茂別、壮瞥を経テ紋釧ニ至ル鉄道」が挙げられていたその計画通り、倶知安から東倶知安（京極）までの軽便鉄道は 1919(大正 8)年 11 月に全線開通し、「京極軽便線」と呼ばれた。東倶知安から脇方までは 1920(大正 9)年 7 月に開業、脇方鉱山の鉄鉱石の大量輸送が始まった。これが、この鉄道敷設の大きな目的であった。その後、鉄道の延伸を強く望んだ喜茂別住民の熱意に応える形で倶知安の経済人中村与三松氏が中心となって 1925(大正 14)年に胆振鉄道株式会社を創立し、京極軽便の喜茂別延伸を強く働きかける運動を開始した。その結果地方鉄道建設工事施行の許可を得て着工し、1928(昭和 3)年 10 月 21 日に京極から喜茂別まで延伸する胆振鉄道が開通した。さらに、日本海と太平洋を結び紋釧から室蘭まで繋がる鉄道を目指して、1930(昭和 5)年 12 月、胆振縦貫鉄道株式会社発起人による鉄道布設免許の申請が行われ、工事は伊達方面から着手され 1940(昭和 15)年 12 月に伊達紋釧と徳舜瞥間が開通、1941(昭和 16)年 10 月には喜茂別と徳舜瞥間が開通し、倶知安と伊達を結ぶ全線が開通したのである。折しも、この全線開通の約 2 ヶ月後の 12 月、日本は対米英宣戦布告を行い太平洋戦争へと突入し、脇方鉱山や栄、徳舜瞥間の鉄鉱石が急ピッチで室蘭の製鉄所に送られるという戦時体制に組み込まれたのである。戦況が膠着し敗戦の色が見えるようになった 1944(昭和 19)年 7 月、戦時体制下での地下資源輸送

体制を強化するため、胆振縦貫鉄道は国鉄に買収された。

終戦後も、鉄鉱石や農林産物の輸送、地域住民の足として寄与してきた国鉄胆振線は、戦後沿線鉱山の閉山が相次いだことやモータリゼーションの波に押されて、1986(昭和61)年10月31日をもって廃線となった。

・『新喜茂別町史／下巻』（P72～83）

23 お大師山（喜茂別）：👉P29

●お大師山の石仏八十八体の種類と寄進者数

- ① 薬師如来：23 体／寄進者 34 人
- ② 千手観音：13 体／寄進者 17 人
- ③ 十一面観世音：11 体／寄進者 23 人
- ④ 阿弥陀如来：10 体／寄進者 16 人
- ⑤ 大日如来：6 体／寄進者 11 人
- ⑥ 釈迦如来：5 体／寄進者 6 人
- ⑦ 地藏菩薩：5 体／寄進者 6 人
- ⑧ 観世音菩薩：4 体／寄進者 4 人
- ⑨ 不動明王：3 体／寄進者 4 人
- ⑩ 虚空蔵菩薩：4 体／寄進者 6 人
- ⑪ 大つう羅修仏：1 体／寄進者 1 人
- ⑫ 文殊菩薩：1 体／寄進者 2 人
- ⑬ 毘沙門天：1 体／寄進者 10 人
- ⑭ 馬頭観音：1 体／寄進者 2 人

・『新喜茂別町史／下巻』（P495～499）

24 日鉄鉱山跡（栄）：👉P30

● 鉾山における朝鮮人の強制連行と強制労働の歴史

喜茂別町内には、日鉄鉾山（旧上喜茂別鉾山）、喜茂別鉾山（黒橋地区）、中山鉾山の三箇所が記録されている。各鉾山の消長は、日鉄鉾山が 1938(昭和 13)年～1953(昭和 28)年、喜茂別鉾山が 1935(昭和 10)年～1944(昭和 19)年、中山鉾山が 1936(昭和 11)年～（不明）である。

各鉾山の裏面史として、朝鮮人の強制連行と強制労働の実態があった。

「太平洋戦争下の 1944(昭和 19)年 9 月、朝鮮半島にも国民徴用令が適用され、無差別な拉致（らち）連行が強行された。1939(昭和 14)年から 1945(昭和 20)年にかけて、日本各地に強制連行された朝鮮人労務者は 72 万人以上といわれるが、その実数は未だ明らかではない。後志地方への連行人数は「北海道開拓記念館資料」によれば、19 事業所、9,054 人である。本町の日鉄鉾業株式会社上喜茂別鉾山への朝鮮人連行人数（割当数）は、1945(昭和 20)年 1 月現在で 200 人となっている。

これら朝鮮人労務者は、逃亡する以外に、事業場から抜け出すことはできなかった。いったん逃亡に成功しても、その多くは官憲によって元の事業所へ送り返されるか、他の事業所へ回されたりして、終戦までは国内どこかで強制労働に従事させられた。朝鮮民族としての個人の尊厳でもある言語や生命までも奪い、ひたすら戦争の具として扱った歴史の究明は、大きな課題そのものであるといえよう。（平成 4 年 3 月・北海道開拓記念館）」

・『新喜茂別町史／上巻』（P774～783）

25 クレードル興農事務所（喜茂別）：👉P31

● 農民の不屈の闘いの象徴であったホワイトアスパラガス加工の歴史

本町におけるホワイトアスパラガスの栽培とクレードル興農に連なる缶詰加工産業の歴史を、『広報きもべつ』（2007 年 8 月号）の特集から引用する。

「アスパラガスの“揺籃（ようらん）”を告げるメッセージ

“喜茂別をしてアスパラガス農村とし、東洋のアスパラガス王国として外貨を獲得しよう。”（旧『喜茂別町史』）

これは、喜茂別におけるアスパラガス栽培功労者のひとり、当時の農会長荻野栄次郎が1929(昭和4)年の「村報」（「広報きもべつ」の前身）に掲載したメッセージです。まさに、アスパラガスの“揺籃（ゆりかご、ものごとが発展する初めの意、英語ではcradle）”を告げる歴史的宣言だったと言えます。以来、「アスパラガス栽培発祥の地」として日本一のホワイトアスパラガス生産量を誇る時代を迎えるに至った喜茂別の歴史は、幾多の困難を乗り越えるべく決断を重ねてきた栽培農家によって築かれてきたのです。

栽培に踏み切る最初の決断

1925(大正14)年、喜茂別村長志賀勘治は、アスパラガスこそ本村に適した作物であることを見抜き、村農会の技術員佐藤恒雄を岩内に派遣して苗100株を譲り受け、村内で試作しています。これが、喜茂別にアスパラガスが入った最初です。

その後もアスパラガスの本格的な導入に向けて努力を続けた千葉忠次郎村長にあって、1928(昭和3)年、北海道農業におけるアスパラガス生みの親である岩内町の下田喜久三博士は喜茂別の地質や気候などを調べ、アスパラガスの栽培に適した土地であると結論付けました。村長と下田氏は全村各地区に赴き、アスパラガスの収益性の高さを訴えます。しかし当時、農家は各種薬草の苗にだまされたこともあり、なかなか前向きになれません。苗を植えて3年目からようやく収穫できるということも、農家にとっては一種の冒険でした。

そんな中で、比羅岡の行天慶太郎氏が、「だれも作る人がいなければ、自分一人で引き受けても良い」と発言したのがきっかけとなり、越後忠作氏ら有

志も加わって、1929(昭和4)年の春、約40町歩作付けすることになったと記録にあります。これが、喜茂別におけるアスパラガス耕作の発祥です。この決断がなかったら、喜茂別のアスパラガスはなかったと言ってよいでしょう。

農民の手による喜茂別産業組合缶詰工場建設の決断

アスパラガスの耕作組合が1929(昭和4)年に結成され、生産されたアスパラガスは当初、日本アスパラガス株式会社(岩内)が全量買い取り、缶詰に加工する契約となっていました。しかし、会社は次第に、原料が規格に合わないなどという理由で事実上の価格引き下げを強行するようになり、農家の不満が高まって社会問題となります。この状況のなかで、函館や東京で事業を展開していた缶詰問屋の資本家が朝日アスパラガス株式会社を設立して、農家と別の契約を結ぶようになりました。同様に、小樽の極東缶詰株式会社も農家との契約を開始します。しかし、3社がいずれも農家との契約を守らなくなったことから、生産農家は3社との契約関係を清算して、当時喜茂別村産業組合専務理事であった丸子斉氏が中心となり生産者自らが加工場を建設し運営することを選択するに至ります。

この困難な道を選択する決断は、決して容易ではなかったに違いありません。しかし、経済不況の中、資金面や製造技術の面など幾多の難問を乗り越えて、「農民のための、農民の手による工場」喜茂別産業組合缶詰工場が、1939(昭和14)年5月操業を開始します。事業は順調に進展し、原料アスパラガスの単価の引き上げにもつながり、喜茂別産業組合が他3社に対して価格面でも常に影響を与えるようになりました。やがて、3社は市場から撤退します。北大農学部荒又操教授は、この喜茂別産業組合缶詰工場の設立を、「日本の産業組合史上に輝かしい一頁をとどめるもの」と評しています。」

・『広報きもべつ』2007年8月号「特集：アスパラガスのホワイトルネッサンスを展望する」

26 傾斜地試験場跡（知来別）：👉P32

●傾斜地試験場から学んだこと

傾斜地試験場の歴史を、『広報きもべつ』（2011. 11）の特集から引用する。一父親の渡辺直七さんが著した『知来別部落史』を補うように、渡辺俊雄さんは地区の仲間と一緒に、1995（平成7）年、知来別に入植した人々の代々の居住地を地図に記入した資料を作成しました。その地図を拝見しながら、渡辺俊雄さん、信子さんご夫婦のお話に耳を傾けます。

「傾斜地試験場というのは農林省直轄の施設で、1948（昭和23）年に菊地久治町長が知来別に誘致したんだよ。知来別に常駐して試験像の指揮を執っていたのは藤原俊英さんという人で、38年に閉鎖するまでずっと試験場にいましたね。この藤原さんと私は仲が良くて、まだ若かった私はよく試験場に遊びに行っては、いろんなことを学んでいました。知来別を含め本町全域に傾斜地の耕地が多かったので、降雨による表土の流出をどう防ぐかは、大きな課題だったんだね。試験場では、様々な実験施設を作りながら次々と新しい営農技術や器具などを開発していたね。特に画期的だったのは、アスパラやジャガイモ畑の畝を等高線に沿って横に作る方式でした。それまでは、傾斜地に縦方向で畝を切っていたから、この横畝にはびっくりしましたよ。それまでは全く考えもしなかった方法だからね。これだと表土の流出も抑えられるし、作業も楽だったから、あっという間に全町に広がったなあ。今ではほとんどの農家が傾斜地でも横畝が当たり前だけど、当時は画期的なことだったんだ。所々にグリーンベルトを入れて土壌浸食を抑えたり、傾斜地に合う消毒や肥料の試験を行ったり、傾斜地に適する特殊な農機具をメーカーと一緒に開発したり、大きく貢献したと思いますよ。」

・『広報きもべつ』2011年11月号「特集：農村青年の自治活動を振り返る」

資料編 2 : 年表を歩く

※ 詳しい年表は『新喜茂別町史／下巻』（P517～549）をご覧ください。

- 1857(安政 4)年 松浦武四郎、尻別川流域を探索
 📍1 : アイヌのサケの漁場 (P6/P33)
 📍2 : 最上流地点ヘタヌ (P7/P33)
- 1858(安政 5)年 松浦武四郎、中山峠越えの内陸路を探索
 📍3 : 後方羊蹄（しりべし）社跡 (P8/P34)
- 1869(明治 2)年 開拓使設置、「蝦夷」を「北海道」と命名
- 1871(明治 4)年 東本願寺道路竣工、東久世長官ら検分で喜茂別を通る
 📍4 : 本願寺道路開削と中山峠 (P9/P35)
- 1871(明治 4)年 阿部嘉左衛門ら三家族とアイヌがシンノシケコタン着任
 📍5 : シンノシケコタン (P10/P35)
- 1882(明治 15)年 開拓使を廃し、函館・札幌・根室の三県を置く
 虻田郡各村戸長役場設置、喜茂別は虻田村に
 この頃、胆振、後志にバッタの被害広がる
 📍6 : バッタ塚 (P12/P36)
- 1886(明治 19)年 三県一局を廃し、北海道庁を設置
- 1891(明治 24)年 喜茂別駅通所を創設、阿部嘉左衛門が取扱人に
 📍7 : 喜茂別駅通所跡 (P13/P37)
- 1897(明治 30)年 真狩村が虻田村から分村、喜茂別は真狩村に
- 1897(明治 30)年 北海道国有未開地処分法が公布、移民が急増し開墾進む
 📍8 : 伏見神社 (P14/P38)
 📍9 : 南部団体開拓の碑 (P15/P39)
 📍10 : 先住民アイヌへの土地付与 (P16/P39)
 📍11 : 三宅伊勢松頌徳碑 (P17/P40)

- 1908(明治 41)年 北海道国有未開地処分法改正により大農場の進出が増大
 📍12 : ソーケシュオマベツ駅通所跡地 (P18/P40)
- 1911(明治 44)年 山梨団体が喜茂別にも集団移住
 📍13 : 喜茂別馬頭観音碑 (P19/P41)
 📍14 : 山梨団体入植地跡 (P20/P41)
 📍15 : 福島団体入植地跡 (P21/P43)
- 1912(大正元)年 阿部嘉左衛門死去、喜茂別駅通所は伏田勉が引き継ぐ
 📍16 : 阿部嘉左衛門の墓 (P22/P43)
- 1913(大正 2)年 天候不順と大水害で真狩村開村以来の大凶作
 📍17 : 比羅夫神社 (P23/P44)
- 1914(大正 3)年 第一次世界大戦勃発し、大正 7 年まで戦争景気が続く
 📍18 : 留産地区地神の碑 (P24/P45)
- 1917(大正 6)年 真狩村から喜茂別村分村
 📍19 : 開村記念碑 (P25/P46)
 📍20 : 黒沼と龍神沼 (P26/P46)
- 1927(昭和 2)年 昭和大金融恐慌始まる
 📍21 : 庚申堂 (P27/P47)
- 1928(昭和 3)年 胆振鉄道(喜茂別～京極間)開通
 📍22 : 胆振鉄道喜茂別駅跡 (P28/P48)
 📍23 : お大師山 (P29/P49)
- 1937(昭和 12)年 日中戦争始まる
 📍24 : 日鉄鉱山跡 (P30/P49)
 📍25 : クレードル興農事務所 (P31/P50)
- 1945(昭和 20)年 第二次世界大戦終結
 📍26 : 傾斜地試験場跡 (P32/P53)

あとがき

この冊子は、既に看板が設置されている町内 13 箇所の史跡・旧跡の案内文を最新の調査研究の成果に基づいて見直し、さらに 13 箇所を追加して作成した【史跡ガイドブック】です。「きもべつ歴史プロジェクトの会（KHP）」と喜茂別町教育委員会が、協働で作成しました。新規の記述内容はほぼ全て KHP のメンバー 11 名で作稿を分担し、議論と推敲を重ねたものです。

KHP は、活動を始めて今年で 11 年目を迎えました。これまで、「阿部嘉左衛門没後百年記念シンポジウム」（2013 年）や「喜茂別分村百年記念講演会」（2016 年）を開催したほか、現地調査と文献研究の活動成果を会報『ヌプリ』7 号、8 号として発表してきました。この冊子も、町民の皆さんと一緒にわが町の歴史を振り返りたいという思いで、教育委員会と制作しました。読みやすい内容になっていると思いますので、ご活用いただければ幸いです。

【執筆・編集スタッフ：きもべつ歴史プロジェクトの会（KHP）】

斉藤久（会長）、小原文生（副会長）、斉藤恵、中野美代子、樋原てい、樋原豊、松井孝司、松田薫、宮本弘夫、吉見啓一、梅田滋（事務局）※五十音順

※東前寛治氏より多岐にわたりご指導いただきました。また、石川幹夫氏より資料についてのご指摘などいただきました。合わせて感謝申し上げます。



【町民、読者のみなさんへのお願い】

喜茂別町のみなさん、読者のみなさん。

この「史跡ガイドブック」へのご意見などをお寄せください。

また、記事に関連する情報や資料、写真などがありましたら、おしらせください。

改訂版を発行する機会があれば、参考にさせていただきたいと思います。

みなさんと一緒に、「史跡ガイドブック」を充実させていきましょう。

●連絡先

きもべつ歴史プロジェクトの会（KHP）

・会 長：齊藤 久（0136-33-6028）

・事務局：梅田 滋（090-8374-3567）

喜茂別町教育委員会

・担 当：生涯学習係（0136-33-2203）

書誌名 史跡ガイドブック きもべつの歴史を歩く

執筆者 きもべつ歴史プロジェクトの会会員

発行日 2019(平成 31)年 3 月

発行者 喜茂別町教育委員会

